炕（カン）のある暮らし（其の三）

黒竜江省哈爾濱郊外の農村概況調査から

西澤治彦

はじめに

数年来、中国東北地方の炕を見て回っているが、このたび、短期間ではあるが、黒竜江省哈爾濱（ハルビン）市郊外の農村を訪ねる機会があった。漢族のほか、朝鮮族の家も訪問することができたが、基本的には遼寧省でみた漢族、朝鮮族の炕と大差はなかった。黒竜江独特の様式があるかと期待していたのであるが、訪ねた範囲内では差がなかった。それでも漢族のもは、解放前からある古い茅葺きの家をみることができた。朝鮮族の炕は延辺朝鮮族自治州の朝鮮族とは異なる様式で、むしろ漢族に近かったが、それでも低く広めな炕、清潔にしている点など、朝鮮族独特の特徴を維持していることも確認できた。また比較的豊かな別な村では、「暖気」（温水ヒーター）を引いた新築の家（漢族）をみることもできた。さらに、最初に訪ねた村では、満州国時代に日本人が建てた家も多数残されており、その様式も確認することができたのは、一つの収穫であった。以下、今回の調査内容を簡潔に記録に留めておきたい。

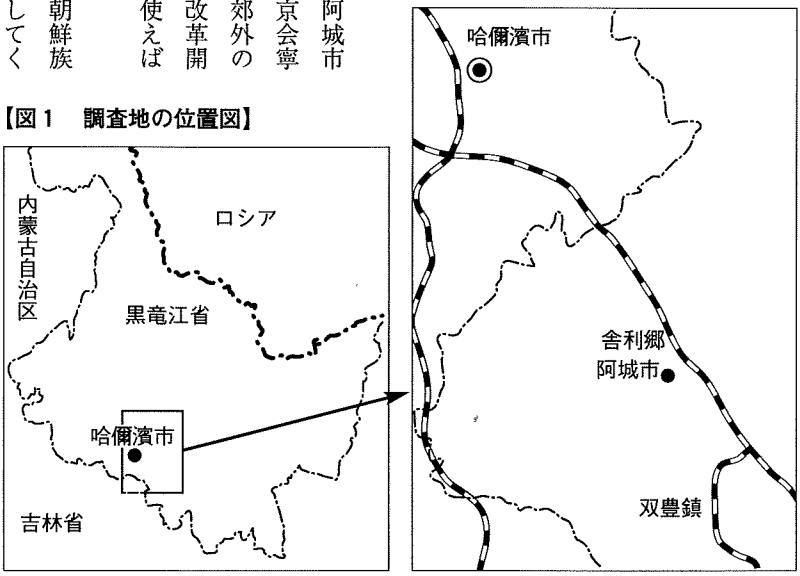
調査日程と調査地

九月八日　哈爾濱入り
九月九日　風邪のため休養
九月一〇日　阿城市双豊鎮新民村・舎利郷新合村
九月一一日　市内をまわる
九月一二日　哈爾濱発

今回訪ねたのは、哈爾濱市から三〇キロほど東南に位置する阿城市である。阿城市郊外はかつて金代の都がおかれたことろで、上京会寧府跡のほか、太祖阿骨打の陵、歴史博物館などがあり、哈爾濱郊外の数少ない観光地として内外の旅行者が訪ねるところでもある。改革開放以降、観光地として整備されたようで、現在では高速道路を使えば哈爾濱市内から三〇分程でいける。

遺跡を見学したあと、付近の農村を車で走りながら、村人に朝鮮族も住んでいる村を訪ね、訪れたのが双豊鎮新民村である。案内してく

【図1　調査地の位置図】



れた運転手の話では、この一帯は幹線道路ぞいにあり、比較的豊かな村落である、とのことであった。確かに貧困村では決してないが、土壁、茅葺きの古い家もかなり残っており、それほど豊かな村には見えなかった。特に江南農村と比べたら、豊かさの象徴である「楼房」（二階、三階の家）が一つもなかった。もっとも江南農村は中国の中でも特異な場所であり、ここと比較するのは適切ではないかも知れない。

帰路は高速を使わず、旧道を走りながら、もう一つの落を訪ねてみた。それが舎利郷新合村である。ここでも「楼房」はなかったが、哈爾濱市により近いこともあり、新築のレンガ造りの家が目につくなど、より豊かな村落であった。実際、ここで「暖気」を取り付けている農家を見せてもらった。

事例報告

阿城市双豊郷新民村

村に入って後、村人に聞いて初めて知ったのであるが、この村は満州国時代、日本人の役人が住んでいて、当時「官屯」と呼ばれていたという。住んでいた日本人の家は二〇戸ほどで、現在もほとんどがそのまま残っている。去年、この村にかつて住んでいた日本人が訪ねてきたという。

住民は漢族が多いが、少数の朝鮮族もいる。かつて朝鮮族は二〇〇戸ほどあったが、改革開放後、韓国への出稼ぎなどにより、その多くがこの村を離れ、現在は二〇戸ほどしか残っていないという。これが事実だとすると、凄まじい人口移動がこの地でも起こっていることになる。

村によってはトウモロコシなどを栽培しているが、この村は水田耕作をしており、村の回りには収穫前の稲穂が色づいていた。稲作をしていることもこの村が比較的豊かな理由であるとは、運転手の言葉である。従って、炕の燃料は稲藁で、石炭を使うことはないようである。炊事には、プロパンガスも普及している。

侯永山氏宅（漢族）

古い土壁と茅葺きの屋根の家があったので、伝統的な漢族の間取りや炕がみられると思い、訪ねてみた。築六〇年は経っているという。長屋の左半分が侯永山氏宅である。南側の窓に面した位置に広めの炕が一つあるほか、北側にも小さめの炕が一つあった。遼寧省新賓県でみた漢族の「南炕」「北炕」に相当するが、このような間取りは初めてみた。伝統的な漢族といっても、さまざまな炕の配置があったことが分かる。炕の上には「炕席」でなはく、ビニール地のものが敷かれていた。竈は南炕に一つあるだけで、鍋も漢族式のが一つあるだけだった。北炕には小さな焚き口が一つある。炕は冬の間は一日三、四回焚く。燃料は稲藁で、石炭は高いので買わないという。

両親は南炕で寝り、蒲団を敷くときは頭は北側に向ける。子供は北炕に寝るが、頭は西側に向ける。

炕卓は長方形でかなり使い込んでいて古そうである。手作りだという。炕卓は使わないときは裏返して水瓶の蓋としている。炊事にはプロパンガスも併用する。また、夏の間外に臨時の竈を作ることはないのかと聞くと、鉄製の竈があると倉庫から取り出してみせてくれた。埃にまみれていて何年も使っていないようだ。訪ねたときは夏の終わりだったが、炊事のためかすでに炕を焚いていて、炕の床はほのかに暖かかった。

【図２　侯永山氏宅の間取り】

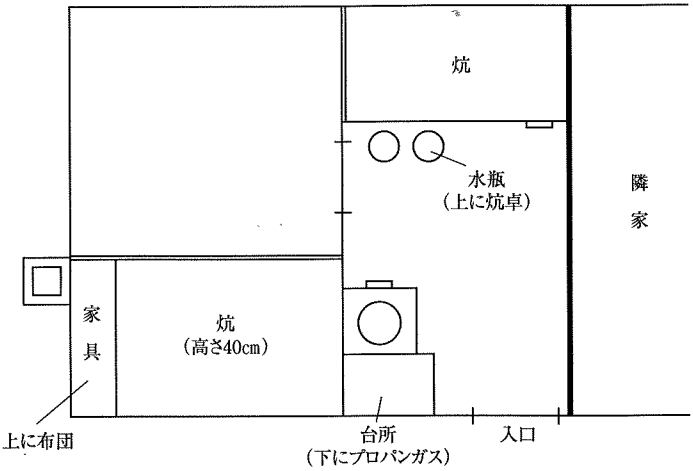


写真２　南炕の上でくつろぐ家族

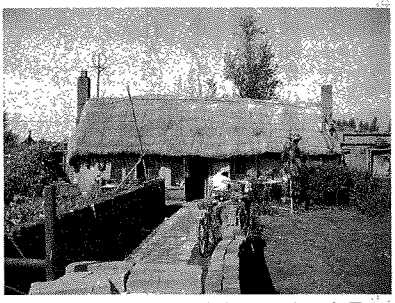


写真１　侯永山氏宅(左半分)の全景

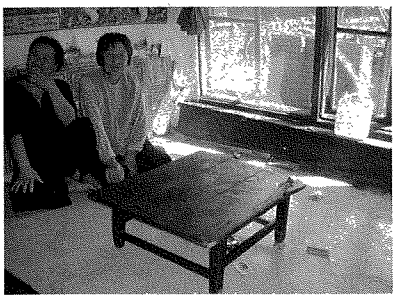


写真４　炕卓を炕の上に出してもらったところ

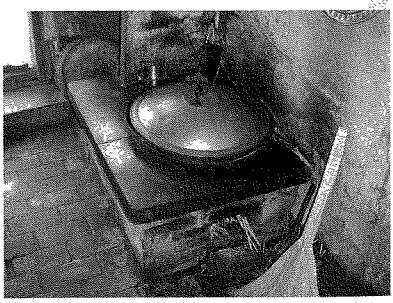


写真３　炕の竈　鍋は一つ

朱鎮方氏宅（漢族）

村を歩いていると、何人かの人が集まってきてくれたが、その中の一人が、自分の家を案内するといってくれた。ついていって通されたのが、朱鎮方氏宅（漢族）であった。

この家も解放前からありそうな古い家で、屋根は茅葺き、壁は下側の1／3がレンガ、上側の2／3が土壁になっている。壁でしきられているので二つあるように見えるが、焚き口も一つしかないことから、炕は一つのみとなっている。竈の鍋も一つのみで、漢族式のものである。

朱鎮方氏は今年九六歳で、かつて村長をしていたという。案内してくれたのはその息子であったが、私が満州国事

写真5　炕卓は普段は水瓶の蓋になる

写真6　小さめの北炕

写真7　夏の間に使うという鉄製の竈

代の調査に来たと思って父にひきあわせてくれたのだろう。何でも聞いてみたらいいというので、当時の話をいくつか聞いたが、耳が遠いのと寝起きのせいか頭がさえていなく、昔の話を聞くことはできなかった。

それにしても家族や近所の人などが集まって、狭い部屋の中は一〇人くらいの人で一杯になった。開放的で人望のある家なのだろう。炕を中心にして集う人々の姿は印象的であった。炕にあがれともいってくれたが、部屋の間取りをとったり、写真を撮ったりする必要があり腰掛けるに留めた。

竈の隣に大きな釜があり、これは豆腐づくりに使うものだという。大豆をひく機械もおいてあった。豆腐は自家用ではなく、販売用とのこと。農家で販売用の豆腐づくりをしているのは初めてみたが、最近はどうやら使っていないようであった。これが解放前から在るものかは聞きそびれた。

この家でも炕卓は自家製の正方形のもので、相当古そうであった。使わないときはやはり裏返して水瓶の蓋にしている。炕沿は木製で、炕席の代わりにビニール地のシートを敷き、その上に布を敷いている。訪ねたとき、ちょうど昼食中で、炕卓を囲んで家族の者数人が食事中だった。炕に上がっている者と炕沿に腰掛けている者とがいた。朱鎮方氏は奥の炕の上で寝ていた。なかなか食事中をところをみることができないので、これはいい機会と、挨拶していると、みるみるうちに食卓を片付けてしまい、写真を撮る暇もなかった。

質素な食事を外国人に見られたくなかったというのもあろうが、炕は接客の場でもあるし、この部屋しかないので、客がきたらすぐに片付けるのが礼儀なのかも知れない。もっとも近所の人間が訪ねてきたときは別であろうが。どのような食器でどのような食事をしていたかは、机の上に置いた食べかけの食器類から想像できよう。

寝るときは、頭を北側にするとのことだが、朱鎮方氏は南側を枕にして寝ていた。南の方が窓越しに明るい日差しが入って暖かいからだろう。頭の方向をどうするかは、それほどの強い規範が働いているわけではなさそうであった。

【図3　朱鎮方氏宅の間取り】

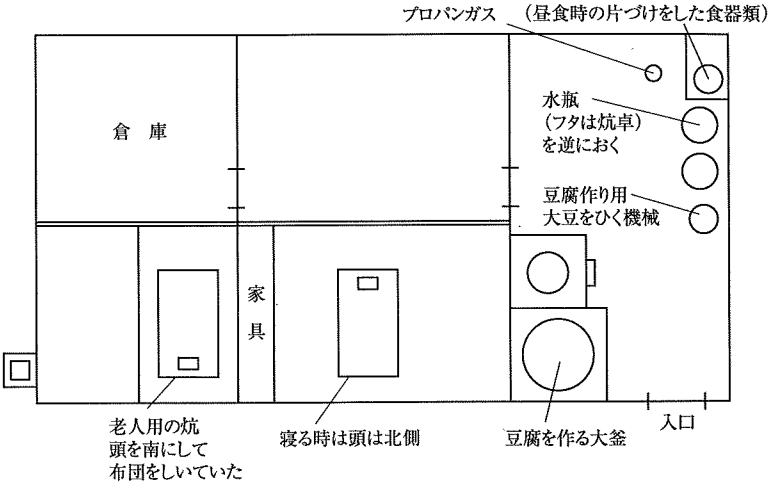


写真9　炕の上でくつろぐ家族

写真8　朱鎮方氏宅の全景

写真11　大釜に隣接する竈　鍋は一つ

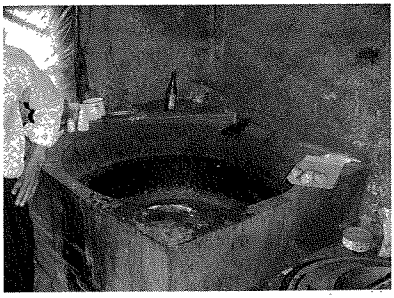


写真10　豆腐を造るのに使うという大釜

朱元日氏宅（朝鮮族）

朱鎮方氏宅で会った人のなかに朱元日氏がいたが、朝鮮族だというので、お宅を見せてもらうことにした。氏は父の代に朝鮮半島南部から中国の東北地方へやってきたという。この村には、一九五一年に移住してきた。

訪ねた家はレンガ造りの長屋の左半分で、屋根は茅葺きであった。ところが一歩中に足を踏み入れてそのきれいさに驚いた。朝鮮族の人は概して部屋をきれいに保っているが、今までみてきた中で最もきれいな部屋であった。今年になって改修したばかりだという。息子さんが韓国で働いているとのことで、経済的な余裕が生まれたようである。炕は部屋の七割を占めるぐらいに大きく作られ、その上に敷いているビニール地はピカピカに磨かれている。炕

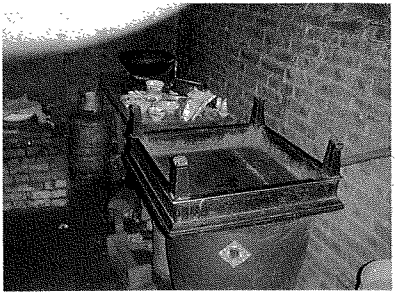


写真12　ここでも炕卓は瓶の蓋となる

写真13　炕卓を地面においたところ

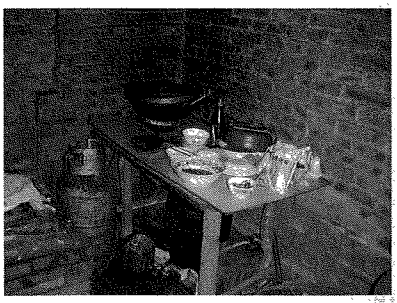


写真14　台所　食事中だった食器類とおかず

は朝鮮族らしく、高さも三五センチと低めになっている。

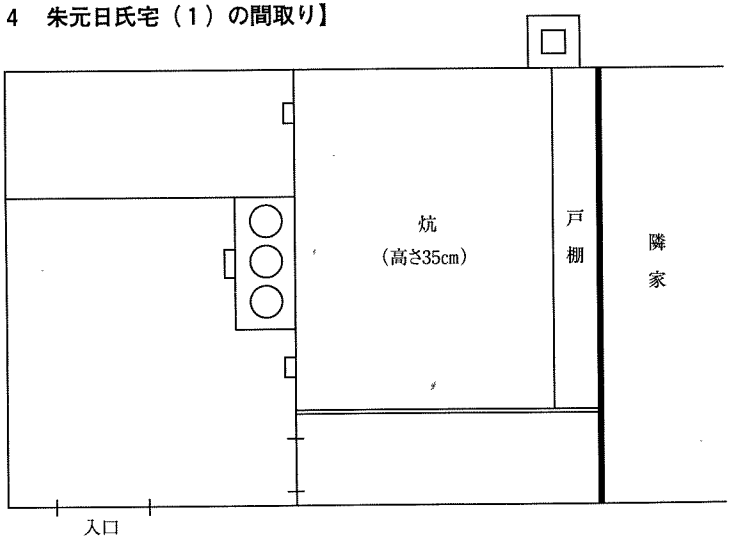
家具類も、従来の棚や蒲団に代わって、壁一面に作りつけられた収納戸棚があるだけである。広い炕の上には何もなく、炕卓すら見あたらない。これを質すと、笑いながら収納の戸をあけ、中から折りたたみ式の円形の炕卓をころがしながら取り出してくれた。日本のちゃぶ台をやや小さくした大きさであった。「パプサン」ともよんでいるとのこと。

竈は一つだが、漢族と違って、3つの鍋が設置されており、鍋の淵も一〇センチほど高くなっているのも朝鮮族の特徴である。また、炕が大きいせいか一つの竈では暖房効果が不十分とみえて、竈とは別に左右に小さな焚き口が二つ設けられていた。

寝る際には、蒲団は東西に敷き、東側に頭を向けるとのことであったが、人数が少ないときには南北に敷き炕沿側、つまり南側に頭を向けて寝ることもあるという。

朱元日氏は裏にもう一軒、家を所有しているというので、それも見せていただいた。土壁、茅葺きの屋根の小さな古い家で、隣の大きめの家と壁が接していた。家の間取りや炕はまぎれも

【図4　朱元日氏宅（1）の間取り】



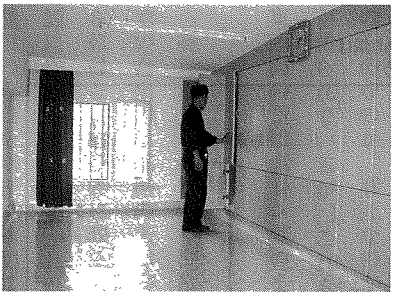


写真16　改修された炕

写真15　朱元日（朝鮮族）の二軒の全景　左が旧宅

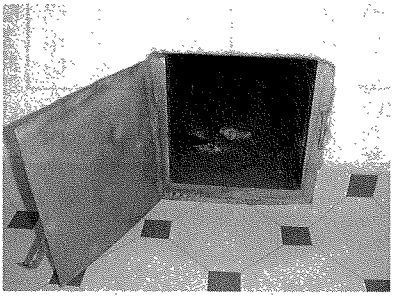


写真18　広い炕のため、第二の焚き口

写真17　竈　朝鮮族式の鍋が３つある

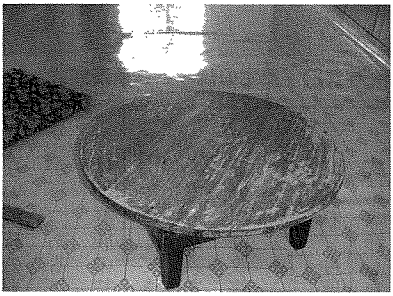
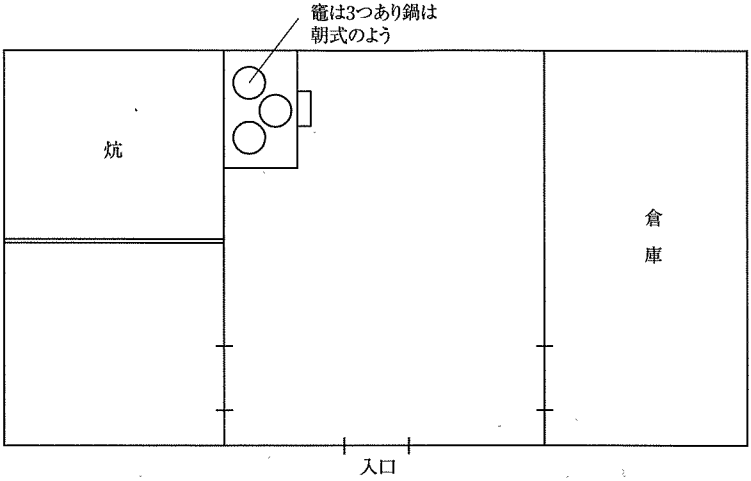


写真20　戸棚にしまっていた炕卓

写真19　炕の第三の焚き口

【図5　朱元日氏宅（2）の間取り】



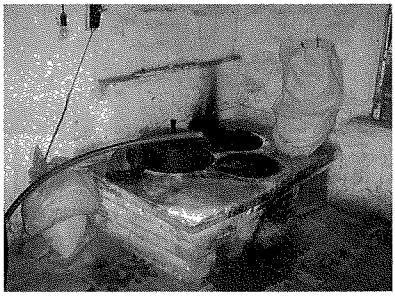


写真22　旧宅の竈　朝鮮族式の鍋が3つみえる

写真21　旧宅の炕　これは漢族式

ない漢族のものだが、竈の鍋が三つあること、淵が高いのは朝鮮族の特徴で、こちらに引っ越してきた際に漢族が住んでいた家を買い、後に竈の部分だけ改修したと考えられる。その後、より広い家を手に入れ、今度は完全に朝鮮族式に改修したことになる。この二つの家は、経済的な余裕が生まれるに従って段階的にそれが行われたこと、二つの家とも、漢族が住んでいた家を朝鮮族式に改修している点が注目される。

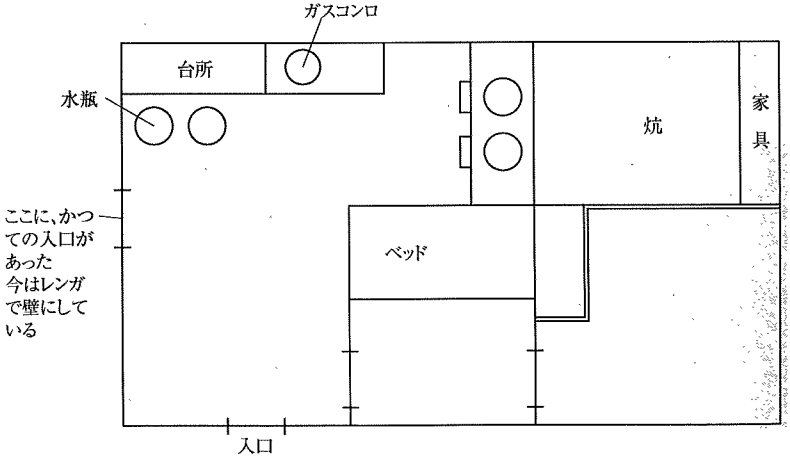
孫彦海氏宅（漢族）

満州国時代、日本人の役人が住んでいた家も一つ見せていただくべ、訪ねたのが孫彦海氏宅（漢族）である。

日本人の家は、二〇戸程あったが、そのほとんどが残っていて現在も使われている。村の家に見慣れてくると、日本人が住んでいた家というのは見分けがつくようになる。決して大きな家ではないが、いずれもがっしりとしたレンガ造りで、屋根も茅葺きではなく、屋根の東西両側の端上には一段高い段差がある。これが建築上構造上のものなのか、意匠なのかは分からない。南面の壁には白いペンキが塗られているが、これも当時からあったものかは聞きそびれた。東西面の壁は赤レンガのままである。

孫彦海氏宅の写真や間取りを見ても分かるとおり、日本人が住んでいた当時は部屋の入口が南側ではなく、西側に作られていた。彼らにはこれが奇妙に映るらしく、日本でもみな入り口は南でなく西側に作るのか、と聞かれた。その後、中国人が引き継ぐに当たり、従来の入口を塞ぎ、南側に新たに入口を新設している。日本人が用

【図6　孫彦海氏宅の間取り】



いたレンガとその後改修したレンガとは色は同じだが大きさが多少異なるため、注意してみると改修箇所が分かる。南面の窓枠も多少の改修が行われている。

さらに、当時の日本人は炕を使わず、畳を使い、暖房は「鉄炉」（ストーブ）を使っていたため、後に炕を作っている。そのため、煙突が屋根の真ん中に建てられるという変則的なアレンジとなっている。また炕も煙突への煙道を延ばす関係からか、これも細いものが付け足された形となっている。竈もその際に新設されたものと考えられる。なお、孫彦海氏宅では平方形で上塗りのしてある、比較的新しい炕卓を用いていた。

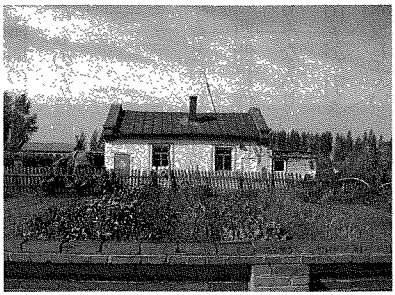


写真23　孫彦海氏宅の全景

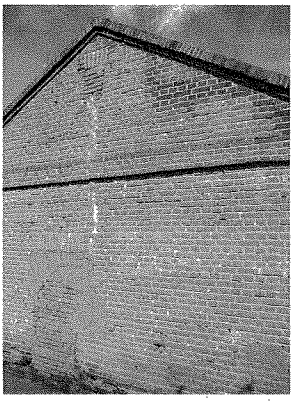


写真24　左下にみえる補修跡がかつての入口

写真25　内側から見たかつての入口跡

写真26　後に造った炕

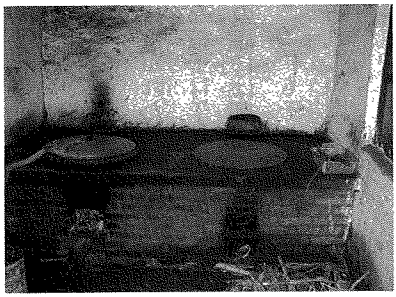


写真27　竈　鍋は二つあるが漢族式

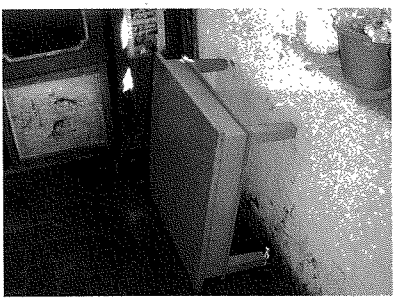


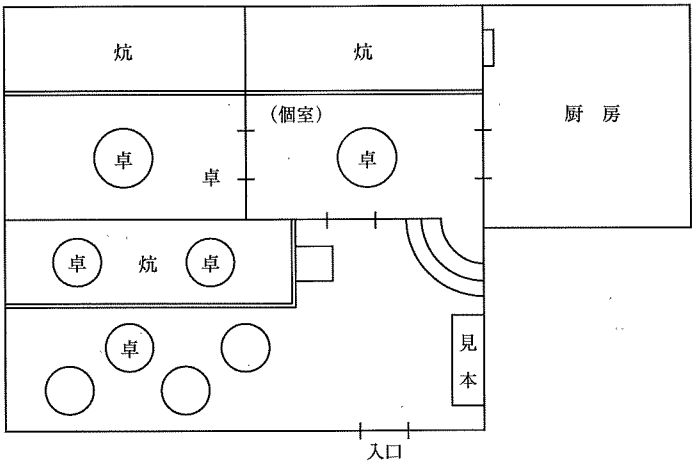
写真28　方形の炕卓　新しい物

幹線道路沿いの食堂

五常之家閭老三殺猪菜館

昼食に、街道沿いの食堂に立ち寄ってみると、なんと客用に炕が設けられていたので、間取りをとり、写真を撮らせてもらった。「殺猪菜」とは、農家が「過年」（旧正月）の時に、飼っている豚を殺して食べるもので、東北の「農民菜」とのことであった。街

【図７　五常之家閭老三殺猪菜館の間取り】



道沿いには、道路が整備され、観光客が訪れるようになった数年前から、こうした店が数軒並び、なかなか繁盛しているようであった。いずれも農民が家族で経営している店である。

間取りや写真の如く、訪ねた五常之家閆老三殺猪菜館には、いくつかの円卓の他、壁際に細長い炕が設けられていた。夏は炕に上がって食事をする人はいないようであるが、炕に腰掛けて食べることはあるようである。炕の上に置かれた低い円卓の回りにある小さな椅子は子供用とのことであった。この店には奥に、二つの個室があるが、ここにもそれぞれ円卓の他に炕が設けられていた。

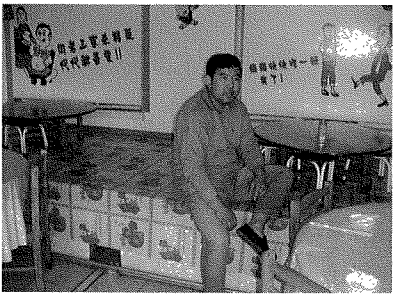


写真30　店内の円卓とその後方の炕

写真29　五常之家閆老三殺猪菜館の全景

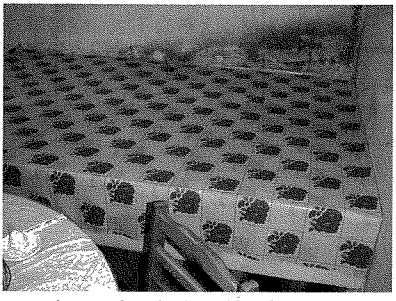


写真32　奥の個室にも円卓と炕がある

写真31　後方の炕とその焚き口

阿城市舎利郷新合村

李氏宅（漢族）

阿城市舎利郷新合村は、高速道路とは別の旧道沿いにある村落であるが、哈爾濱市により近いこともあって、大きな新築の家も目立ち、村全体がより豊かに見える。村の中で新築の一軒におじゃました。

李氏宅は今年新築したばかりで、まだ未完成であった。農業を営んでいるが、新築を機に小商店をはじめるべく、家の中に陳列棚を設けている。豊かなだけあって、李氏宅には、話に聞いていた「暖気」が設けられていた。未完成ということもあって、温水パイプの配置もすべて見ることができた。

興味深いのは、それでも炕を一つ造っていることだった。その理由を聞くと、「暖気」があっても、やはり炕に慣れているので、一つだけ炕を造ったという。また、炕は床が暖かく、炕の上で寝ると腰痛や膝痛が直るからいいとのことであった。

炕があるとはいえ、「暖気」があるため、炕の竈と台所とは分離され、台所、食堂とも完全に独立した間取りとなっていた。

家の新築費が約三万元、「暖気」の材料と工賃が併せて四千元かかるとのことであった。

話を聞いていると、奥にも一軒あるというので、その家も見せてもらった。こちらは一五年前に建てた家だが、こ

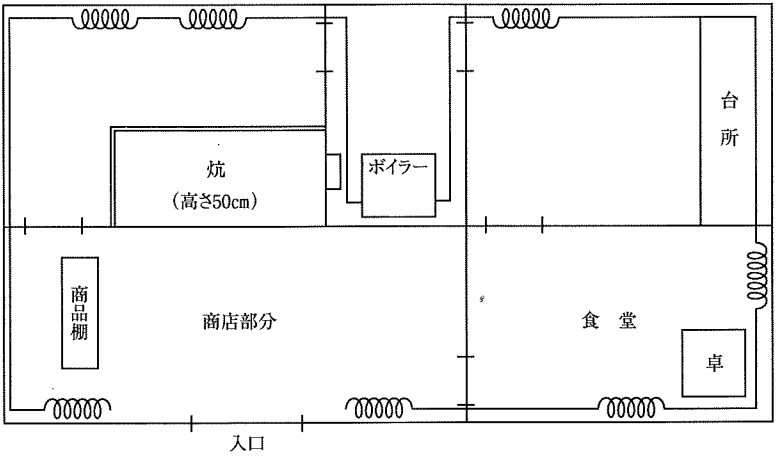
の家にも「暖気」が設けられていた。李氏が中医をしている関係で、一五年前でも資金的に余裕があったのだろう。

但し、間取りをよくみると、「暖気」は南側の片面のみで、炕は二つ設けられている。しかも東側の大きな炕の竈が台所と兼用になっており、より本来の炕の姿を残している。というよりも伝統的な炕に、片面のみ「暖気」を導入したというべきであろう。また、「暖気」のボイラーも、隣接する隣家と共有になっていた。

なお、東側の炕には、両側に壁が設けられている。ベッドではよくこうした意匠をみかけるが、炕にこうした壁が設けられているのは初めて見た。この家では暖気の温水パイプにも木製のカバーがつけられていることから、インテリアに凝っているのであろう。またこうすることにより、プライバシーと保温効果も高まるのであろう。

一五年の時を経た、この二軒の間取りをみることにより、炕と「暖気」の関係の推移が如実に見て取れて興味深かった。さらに数十年後、新築の機会が訪れたとき、炕が残されるか否かを見届けたいところである。

【図8　李氏宅（1）の間取り】



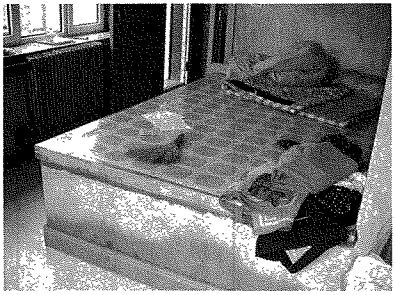


写真34　暖気と炕とが併設されている

写真33　李氏の新宅の全景

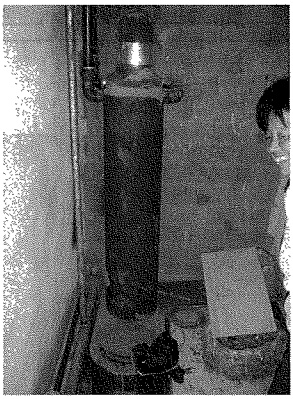


写真36　暖気のボイラー

写真35　南面に設置されている暖気

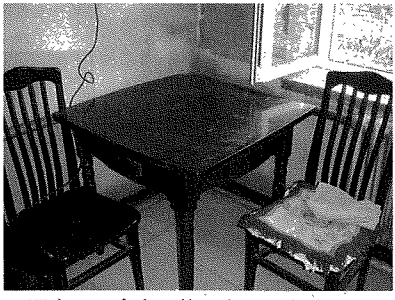


写真38　食事は炕の上ではなくテーブルの上でなされる

写真37　ボイラーの右横にある炕の小さな焚き口

【図9　李氏宅（2）の間取り】

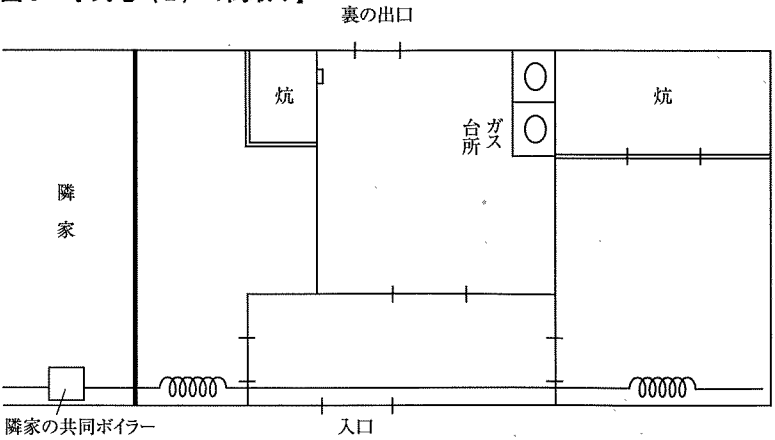


写真40　旧宅の西側の炕の焚き口

写真39　旧宅の東側の炕　両側に壁が設けられている

写真41　旧宅の暖気　これにはカバーがつけられている

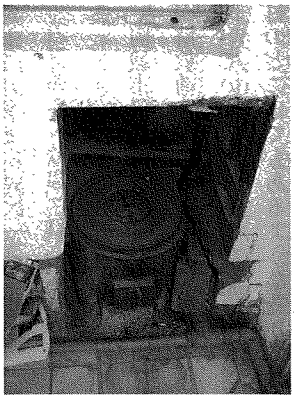


写真42　旧宅のボイラー　隣家と共有

考察

今回、初めて黒竜江省の農村を訪ねたわけであるが、特に黒竜江省独特の様式というものを確認することはできなかった。これは漢族のみならず、朝鮮族も同様であった。

前回の報告（「炕のある暮らし―其の二」）では、考察の部分で、池春相氏の「住文化の特色―民家類型とその変容」という論文を引き、池氏による中国の朝鮮族の民家の類型を紹介した。その中で池氏は第三の類型として、「空間」のある家（オンドル部屋の奥に台所がありそこに行くには走廊を通る）をあげ、これが黒竜江の事例にみえるとしていた。今回見ることのできた朝鮮族の家は二軒と少なく、しかもいずれも漢族の家を改修したものであったので、古い朝鮮族の民家ではなかったということもあろう。

今回訪ねた事例を表にまとめたものが**【表1】**である。

表1

氏名・民族	壁・屋根	炕数	炕の様式	竈数	鍋数	飯卓	備考
阿城市双豊郷新民村							
侯永山（漢族）	半土壁・茅葺き	1	漢族	1	1	長方形	築六〇年
朱鎮方（漢族）	半土壁・茅葺き	1＋半	漢族	1	1	正方形	
朱元日1（朝鮮族）	レンガ・茅葺き	1	朝鮮族	1＋2	3	円形	改修
朱元日2（朝鮮族）	土壁・茅葺き	1	漢族	1	3	—	一部改修
孫彦海（漢族）	レンガ・非茅葺き	1	漢族	1	2	正方形	一部改修
阿城市舎利郷新合村							
李氏1（漢族）	レンガ・トタン	1	漢族	1	無	八仙卓	暖気併用
李氏2（漢族）	レンガ・トタン	2	漢族	1＋1	1	—	暖気併用

阿城市双豊郷新民村の事例でいうと、旧日本人宅を除いて、いずれも茅葺きの屋根で、土壁の家も多く、ほとんどが解放前からある古い家であった。それゆえ、今回は古い家屋を見ることができた。真冬は氷点下三〇度にもなると聞いていたので、さぞかし防寒、暖房の両面において極寒対策が施されているものと想像していたが、家は中国の農村のどこにでもあるような造りであるし、炕もとりたてて特異なものではなかった。これだといくら炕を焚いても、

冬はさぞかし厳しいことが想像される。

侯永山氏宅（漢族）、朱鎮方氏宅（漢族）とも炕は、南炕、北炕の構造で、特に他の地方と変わった点もなかった。また延辺朝鮮族自治州などの如く、炕の広さや竈の上の鍋の数、鍋の形状などにおいて、漢族が朝鮮族の影響を受けるということも全く認められなかった。かつてはこの村にも多くの朝鮮族が住んでいたことを考えると、鍋の数を増やすぐらいの影響があっても不思議ではないのであるが。

伝統的な「炕席」は、さすがにどの家でももはや使っておらず、ビニール地のシートを敷いていた。また炕卓は、侯永山氏宅（漢族）、朱鎮方氏宅（漢族）とも自家製の古い方形のものを使っていた。孫彦海氏（漢族）は新しいものを購入したようであるが、これも方形であった。延辺朝鮮族自治州での調査では、漢族も円型の炕卓を使っていたが、双豊郷新民村でみた数少ない漢族の事例ではそのようなことはなかった。おそらく自分で造るには、方形の方が造りやすいからであろう。こうしてみると、やはり伝統的な漢族の炕卓は、本来、方形であったことが想像される。

朝鮮族の家は朱元日氏しか見ることができなかったし、しかも二軒とも漢族の家を改修したものであった。満州国時代、この村にも朝鮮族が住んでいたのなら、その家屋を見てみたかったところだが、残念ながらそれを見つけ出すことはできなかった。

ただ、朱元日氏自身も一九五一年にこの村に移り住んだように、農村部においても人の移動というのは我々が想像する以上に盛んにあったようで、古い家に住んでいるからといって、元からの住民とは限らない。この点、むしろ漢族の住宅を段階的に朝鮮族式に改修してきた二つの家を見ることができたのは貴重であった。また事例の中では、円形の炕卓を使っていたのは朝鮮族の朱元日氏のみであった。

また、期せずして満州国時代に日本人が住んでいた家を見ることができた。当時の日本人が、当地の合理的な暖房

設備である炕を取り入れなかったのは意外であった。もっとも役人が住んでいてということで、一般の入植農民もそうだったとは言い切れないかも知れない。日本人が住んでいた家は、今でこそ古くなってきているし、回りに新築の大きな家が建っているので取りわけて立派には見えないが、土壁で茅葺き屋根の家が多かった当時としては、がっちりとしたレンガ造りの家で、威風堂々としたものであったろう。しかも炕ではなく、ストーブで暖を取るという生活は彼らから見たら、一段上のモダンな生活に見えたことであろう。

家屋の改修過程という点では、阿城市舎利郷新合村でみることのできた、「暖気」設備の段階的な設置の例も貴重であった。以前から、豊かな農家では「暖気」を取り入れているところもあると、話には聞いていたが、実際に目にしたのはこれが初めてであった。一五年前（一九八八年）は遠慮がちに二つの炕を補足するような南側のみの「暖気」であったが、今年新築したのは、炕が一つに減り、全室に「暖気」が張り巡らされていた。注目すべきは、それでもまだ炕を「捨てきれなかった」点であろう。但し、この炕の焚き口は台所の竈とは分離されている。

このたびの訪問でも改めて感じたことであるが、家屋や間取りなどは、個人の事情もあって実にさまざまで、この村（あるいは郷・県・省）の典型はこうである、と言うようなことはいえない。この点では、東北地方の家屋と炕のつくりは、地域差よりも、むしろ、漢族、満族、朝鮮族という民族の差違の方が顕著に出ているようである。むろん、満族と漢族の境界が曖昧になっていたり、漢族が朝鮮族の影響を受ける場合もあるが、少なくとも地域差よりは明確に差違が表れるようである。今回はこれに日本人の家屋も加えることができよう。このように地域差が希薄なことは、東北地方が、漢族の場合は山東や河北などのよそからの入植移住によって開墾された土地であるという、歴史的な背景もあろう。朝鮮族も外地からの入植者であるが、そのこと故に、かえって故郷の習慣を色濃く残しているともいえよう。

今回訪ねたのは夏の終わりで気持ちのよい日々であったが、いつかは厳冬の時に訪ねてみなければならないであろう。途中立ち寄った食堂にも炕があったことは、冬の寒さを偲ばせるのに十分であった。

炕に代わる暖房として「暖気」が一部の豊かな農家に普及しつつあるとはいえ、「暖気」を導入しても炕を維持している例は、石油やガスストーブを入れてもまだコタツを使っている日本人とよくにている。広大な東北地方の農村部で、極端な温暖化によって冬の寒さが緩和でもされない限り、炕がなくなることは、今後、数十年の単位であり得ないということを改めて確信した。そしてそれに伴う坐法、寝方、食事方法などの身体技法もまた、変わることがないであろう。

引用・参考文献

西澤治彦　二〇〇二「炕のある暮らし—遼寧省新賓満族自治県の農村調査から」『武蔵大学人文学会雑誌』三四—一

二〇〇三「炕のある暮らし（其の二）—延辺朝鮮族自治州の概況調査から」『武蔵大学人文学会雑誌』三五—一

池春相　一九九九「住文化の特色—民家類型とその変容」中国東北部朝鮮族民俗文化調査団編『中国東北部朝鮮族の民俗文化』所収

（二〇〇三年十一月二十一日　受理）